

ウォーミング・アップ

異文化とどうつきあってゆくか

稲賀繁美

※ 以下『朝日新聞』からの引用が多くなりますが、これは新聞すら読まない学生が大多数となりつつある状況に鑑み、代表的な——しかし著者としては必ずしも賛同するわけではない——巨大メディアを利用して、そこからどの程度の情報や問題意識を掴めるかを実験的に示したにすぎません。利害いずれの点でもこのメディアを特権視する意図はないことを、一言お断りしておきます。それ以外のメディア、外国のメディアと比較して、その差異のよってきたる理由を考察すると、入手する情報が立体的になってくることでしょう。

なお本文と同様の話題を某国立大学の授業で取り上げたことがあることを、お断りしておきます。課題として示した(1)受信、発信、(2)内なる論理と外の論理、(3)少数派と多数派、というおおきな3つの問題については、その意図、とりわけ3つの関連をきちんと理解できた学生諸君が10%近くあったことは教師として励みになりました。

しかし問題意識も分らず、反論もできず、「興味がなかった」、「わからなかった」、「自分には関係ない」という反応のほうはるかに多かったのも事実です。これに危機感を抱いたため、あらためて本書の「ウォーミング・アップ」の題材として提供してみました。

1) 西垣通「文化発信欠くマ

A. 日本人は西洋のことをよく知っているか

文化入超国＝日本の病理

ある新聞の「論壇」に載った引用から始めましょう。著者は西垣通(1948-)という人です。

《外国で新年を迎えていると、日本のオメデタサが懐かしく、また悲しい。

情報化社会と人はいふ。だが一步海外に出れば、あふれていたはずの情報は夢幻のように消えてしまう。日本のニュースはほとんど聞こえてこない。邦文文献の翻訳もきわめて乏しい。情報の大洪水と見えたのは真っ赤な偽り、実は列島井戸の中の小渦巻きにすぎなかったのだと目がさめる。こと情報に関するかぎり、日本は恐るべき入超国なのだ。

わたしはいまフランスの地方大学で研究生生活を送っているが、この辺りにはベトナムと中国の区別さえおぼろげな人がたくさんいる。パリのインテリできえ、日本人の内面は測りがたいようだ。こちらはパスカルもデカルトもボルテールも知っているというのに……こうしてチョンマゲとキモノの影を引きずった「顔のない日本人」が不気味なスマイルを浮かべつつ自動車や電化製品を売りにやってくるという、あの奇怪な構図ができあがっていく》¹⁾。

まずこの引用を読んで問い1：パスカル、デカルトとボルテールに関して知るところを記せ。何世紀の人か。またその正

しいアルファベットの綴りを示せ²⁾。

某大学で試したとき、「パスカル」が何世紀に生きていた人が正確に答えられたのは2割以下。「ボルテール」に関しては名前を聞いたこともない人が9割を越えました。日本人は欧米のことならよく知っている、という常識そのものが今や非常識になりつつあるようです。また「ボルテール」と発音しても、中国の人にも欧米の人にも決して通じないということを、皆さんはご存じでしょうか。見かけの情報洪水とはうらはらに、マス・メディアが発達すればするほど、フランスでも日本でも「一般大衆」の知的関心はかえって貧弱になり、外国への眼差しはかえって貧困化しつつあるのかも知れません。知っているのはプロ・サッカーの有名選手とハリウッドの映画俳優とアイドル歌手の名前だけ。そう指摘すると、でもそれで日本ではちゃんと生きて行けるのだから、要らぬお世話だ。教科書で習った固有名詞なんか無意味だ、という反論もありました。またこの機会に、諸君の教室には香港やシンガポールから来た留学生もいるが、日本は第二次世界大戦中香港を占領したか否か、またシンガポールは戦争中何と呼ばれたか、知っているかい、という質問もしてみました。回答には「自分の無知が恥ずかしくなった」という声とともに、「世界史は高校で取らなかったから、知らないのが当然。知らなくて何が悪い。大学の先生だからって偉そうな顔するな」という居直りの返事もありました。

物知りとしての「教養」というのは、お金のようなもの、といった人がいます。持っていないと恥ずかしいし、持っていてみせびらかすのも恥ずかしい。でも精神のお金がない人は、精神の貧しい人。日本は物質的な豊かさの追求に一生懸命だが、この世の価値を越えてゆく人間の探求にも心を向けて欲しいとは、チベットの高僧ケツン・サンポの言葉でした。精神の糧、精神の豊かさのための栄養が「教養」です。固有名詞学習は高校で上がりではない。今から死ぬまで続く一生ものです。でも

ルティメディア論」『朝日新聞』1995年1月5日。ただし「パスカル」は原著者に相談なく、引用者が勝手に付け加えたことをお断りします。なお海外における日本像、とりわけ大衆文化のなかに現れたステレオタイプについて最近日本語で刊行された研究として、村上由見子『イエロー・フェイス——ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』(朝日新聞社、1993)、サム・キーン『敵の顔——憎悪と戦争の心理学』(柏書房、1994)、門間資志『アジア映画にみる日本』(社会評論社、1995、以下続巻予定)、ピーター・ハーイ『帝国の銀幕』(名古屋大学出版会、1995)を指摘しておきます。また柳原和子『在外日本人』(晶文社、1994)はそうとは気づかれぬまま個人の意見を圧殺する日本社会の体質を、在外日本人108人の立場から鋭く逆照射して浮き彫りにします。

2) 問い1の回答と某大学における授業での正答率から。
Blaise Pascal (1623-62) パスカルの法則ほかで有名な天才数学者。クレオパトラの鼻がもう少し「長かったら世界の歴史はうんぬん、の『パンセ』で有名。中央公論社版『世界の名著』を参照したい [正答4人]。René Descartes (1596-1650) 「我思う。ゆえに我あり」。『方法序説』の最初ぐらひは読んでおきたい。座標空間の発案者でもある幾何学者、哲学者 [正答6人]。Voltaire (1694-1778) の名前すら聞いたことがないとは [正答3人。知らない人80%以上]。これでは、日本はフジヤマ、ゲーシャ、チョンマゲ、という「外人」の悪口はいえないでしょう。

こうした「教養」のあることは、大学生であることの(数学でいう)必要条件ではあっても、まだ十分条件とはいえないかも知れません。教養があればそれでよい、とは参らないが、かといって教養がないと困る。とくに一度日本の外に出たときに困る。そのことを少し考えてみたいと思います³⁾。

報道における取捨選択

さて、いまや18歳人口の4割が大学に行く時代なので、もはや「一般大衆」である大学生が「パスカル」や「デカルト」や「ボルテール」なんか知る必要はないのかもしれない。こうした固有名詞が選ばれることそのものが、時代遅れの「西ヨーロッパ中心主義」なのかもしれません。でもはたして我々が必要な情報を外国から取り入れているのかどうか、となれば、これは別問題でしょう。NHKの元会長である島桂次氏(1927-)は、インターネットを通じて民間から世界に情報を発信しようと、1995年「島メディアネットワーク」というものを構想しました。その動機をかれはこう説明しています。

《CNNの湾岸戦争報道じゃないが、情報が地球規模で飛び交っている時代に、日本のジャーナリズムはまるでドメスティックでしょ。国内問題だけに終始して、肝心の日本を含めたアジアからの情報を発信してこなかった。

例えばウルグアイ・ラウンド。ジュネーブの交渉で日本のマスコミは大量の報道陣を送り込んだが、送ってくる情報はコメの話ばかり。あの時の重要ニュースは米国と欧州が情報問題でケンカ別れしたことですよ。CNNやハリウッド映画が欧州に流れ込んで、欧州の文化、伝統はどうなるんだという危機感があつた。でも日本にそんな感覚はゼロでしょ。

日本の貿易黒字が国際的に批判されているが、その原因の重要な部分にお互いにもっと知り合い、信頼関係を築く努力をしてこなかったことがある⁴⁾。

ここで問い2：ウルグアイ・ラウンドについて調べ、島桂次

3) 香港はちゃんと日本に「第二次世界大戦」中占領されています[正答12%、誤答44%、「分らない」34%]。またシンガポールは昭南という地名に変更されました[正答0]。そうした過去が皆さんの目に触れないように、人知れず隠されている事実にもまず気づいてください。それをどう解釈するかが、今からの皆さんの「歴史」への裨のさしかた、つまりは皆さんの「生き方」の選択です。今まで知らなかったのはしかたないけれど、知らないままで「昭南」旅行や香港旅行をする多くの日本人の無神経さだけは考えてください。例えば「21箇条要求」を知らずに中国に旅行するのも同様。「無知」は「不見識」に通じます。[なお、この調査は1994年12月に某国立大学1年次の教養課程学生を対象に実施。回答総数は133人]

4) 「島桂次 SMN 代表に聞く」『朝日新聞』1995年1月4日。

氏の発言が正確であるかどうか点検せよ。

問い3：ウルグアイ・ラウンドにおける米国と欧州との情報問題の「ケンカ別れ」の影響としてどのような事態が発生したか、具体例を挙げて論ぜよ。

問い4：「ドメスティック」とは何を意味するか、辞書を引いて用法を確かめ、日本の実態を分析せよ⁵⁾。

つまり島元 NHK 会長の言うとおりに、日本のマスコミはウルグアイ・ラウンドで一番大事だったはずのことを、日本には関係ないと判断してか、日本ではニーズがないと判断してか、はたまたそうした判断を下すだけの能力すらないままに、日本にいる視聴者には伝えなかったこととなります。でも問い2で問題となっている事実を皆さんはどうすれば確かめられるでしょうか。日本語での「ドメスティック」な報道で、そもそも何が伝えられなかったのかを、日本語で手に入る資料から、いったいどうやって確かめればよいのでしょうか。欠如に気づかない無知。たしかに今では外国の新聞、雑誌と並んでNHKの衛星放送を見ることができます。でもそこで流される情報が、湾岸戦争の場合そうだったように、ひたすら「米国」のCNNのネットワークに独占され、予め「米国」の大衆向けに取材され取捨選択され編集された情報に頼っていることにこそ、欧州は懸念を示したようです。

その欧州で何が起こったか。端的な例は「兵庫南部地震」（「神戸・淡路大震災」）で明らかになってしまいました⁶⁾。独自の特派員をおいていなかったドイツやフランス、イギリスでの報道では、最初のうちほとんどまったく神戸や淡路島の生の現場の映像を伝えることができませんでした。いつからそうなったか知っていますか。これが問い3を解く手掛かりのひとつです。CNNとの提携が切れるや、欧州では（北欧は別ですが）いわゆる国際情報入手する最大の動脈を失ってしまい、もっぱら国内ニュースのみに逆戻りしていたのです。もとよりほとんど存

5) 問い2以下については、解答を示すことはいたしません。日本の外の世界に興味をもつかどうかは皆さんの勝手かもしれませんが、今日日本で「大学生」をしていることの「地球的な「責任」を自覚するかどうかは、皆さん次第でしょう。正解は必ず先生が示してくれるから、それを暗記すればよい、という態度はそろそろ卒業しましょう。皆さんの未来はもはや正解など示されない航路なのですから。大学での教科書はとかく皆さんをより受け身で消極的な人間にすることを助長するようなのですが、これでは本来の意図とは正反対の逆効果です。

6) 兵庫南部地震 1995年1月17日未明、淡路島北端部の活断層を震源として兵庫県南部を中心に発生した地震。死者は5千名を越え25万人が避難所生活を強いられました。名称は当初「兵庫県南部地震」など一定しなかったものの、やがてマスコミでは「阪神大震災」の呼称が定着しました。しかしながら阪神というと淡路島が除外されるため、官庁では本文の呼称が支配的になりました。

在しなかったに等しい日本についての情報は、大災害の場合ですらかろうじて電話一本で伝えるしかなくなりました。世界の情報から疎外された日本、という西垣通さんの懸念は最近かえって増大していたわけです。そして、そうした実態すら、日本に住んでいると我々には知られません。日本では情報が洪水のように溢れていると思われていたのに、実際には日本の視聴者の興味を引きそうもない情報は、あらかじめ取材や編集の段階で、消去され排除されてしまっていたからです。そしてその事実への無知ゆえに、日本は情報において二重に世界から取り残されていたのです。

B. 発信型と受信型？

何を発信するのか

次に問うべきは、では反対に、いかに日本という経済大国の意見や情報を外の世界へと伝えてゆくべきか、それともゆくべきでないのか。そもそも伝えてゆくべき意見や情報はあるのか、伝えてゆくことは可能なか否か、という問いでしょう。例えば下村満子さん（1938-）は、日本が「国際連合」の常任理事国になるべきか否かという議論について、それよりも常任理事国として何をするのかの議論が必要だとして、こう述べています。

《日本は何を機軸に行動するのか、どんな国になり、どんな役割を果たそうとしているのか。例えば、国際貢献を非軍事に徹するなら、それだけの覚悟を定め、国としての行き方を創出していかなければならない。それを世界に向けて発信していくための、整合性のある知的理論武装をしなければならない。》

それなのに、いま日本がやっていることは、その時々の流れに身を任せ、長期的ビジョンもなしに、すべてをあいまいにしたまま、場当たりに既存事実を積み重ねているにすぎない。こんなことを続けていたら、日本はますます国際社会の中で「顔も心もないただの産業マシン」として孤立していくだろう。何

よりも、他国にどう思われるかということ以前に、日本人自身にとってさえ、訳のわからない国になってしまうだろう》⁷⁾。

7) 下村満子「『畏敬』消え「失望」残る」『朝日新聞』1994年1月28日。

問い5：なぜ The United Nations は日本では「国際連合」と訳されるのか。その歴史的経緯を述べよ。また原語と日本語とのあいだにある食い違いや、そこから発生する問題点について論及せよ。

問い6：日本外交の「長期的ビジョン」（ないしはその欠如）について、外交白書などを参考にして、その長所と弱点を指摘せよ。また、諸君が自ら世界のなかで日本を導いてゆく立場にあれば推進したい、ないしは推進する必要があると考える「世界に向けて発信」すべき構想 (visions) を具体的に提案せよ。

朝日新聞の編集委員である下村さんの意見は、日本の「国際派」の憂慮を代弁するものでしょう。でも、問い6のような問いを大学生の皆さんに投げかけると、これも拒絶反応にあってしまうことがしばしばです。政治なんか興味がない。外交なんて自分には関係ない。その反対には、『NO といえる日本』（あえて著者名、出版社名は記載しません）に代表される（?）、しばしばおそろしく自己中心的、自己満足ないしは対米劣等コンプレックスの居直りのような「日本の主張」発信が出て来ます。そして世界のこと、社会の仕組みを少しは弁えているつもり「成熟した日本人」は、ともすればこうした元気のない「NO」には眉を顰め、天下国家にかかわる大問題からは逃げ腰になってしまう。それもまた、日本社会の特徴なのかもしれません。

発信強迫症

「国際化」した社会に向けてとにかく「発信」しなければ、というあせりが一種の強迫神経症になっている、と指摘しているのは、『英語支配の構造』の著者、津田幸男さんです。

《「受信型人間」は劣っていて、現代社会では置いてきぼりにされる存在だという認識が広がり、自己主張できる「発信型人

間]の方が優っているのだから、日本人は「受信型性格」を克服しなければならない、という考え方が広まってしまった。い
いかえると、「受信型性格」は時代遅れであり後進国的であり、
「発信型性格」は先進の特徴であるという強迫観念が、英会話
プロパガンダとからめて、大きく広がったのである》⁸⁾。

「発信型強迫症」は日本人の「外人」コンプレックスや英会話
アレルギーの結果であると診断する津田さんは、いわゆる英会
話恐怖症が、容易に日本人海外旅行者による東南アジア買い物
ツアーでの「日本語帝国主義」へと裏返しになる危険を指摘し
ます。そうした日本語国際語論や英会話不要論も、実は「英語
支配」にたいする日本人の心理的な過剰防衛反応が固着した症
例だというわけです。そのうえで、津田さんは日本にあっては
日本語を使おう、と呼びかけ、つぎのような提言をしています。

《[日本にあって]権力を有する英語民族の英語を使うこと
により、私達は知らず知らずのうちに、英語支配と人種差別を正
当化し、容認しているのである。/この歪んだ人種差別と英語支
配に異議を唱えるために、私達日本人は、[日本にあっては]欧
米人に対しては「日本語」で対抗し、欧米人の支配者意識を突
き崩し、私達の従属意識を払拭していかなければならない》⁹⁾。

その言語が使われている土地ではその言語を尊重しそれを学
び使おう——この主張を津田教授は「母語尊重主義」と呼ん
で、「英語支配打破」のために提唱しています。

私(稲賀)はこの主張には疑問を感じています。まず津田教授
の言う「英語支配」の実態とその「支配者」の内実が疑問です。
例えば多くのフランス人などは、大衆ばかりでなくエリートな
らエリートでいまだに英語への根強い抵抗感を示しますし、外
国語が比較的通じるといわれるドイツでも、実際に流暢に英語
をしゃべれる階層はごく限られています。また英国ほど英語が
通じない国はない、ロンドンほど英語が分からない都市はない、
という「アメリカ人」の冗談まであるくらいですから、ここで
津田教授のいう「欧米人」[津田表記に従う]の実態はいまひと

8) 津田幸男「英語支配の構
造」第三巻館、1990、171頁。

9) 同書201頁。[]内は引
用者が補ったもの。なお「外
人」という呼称は、1980年代
に外国人労働者の滞在者が急
増するなかで、日本での無意
識的な意味としては「黒人」
や「アジア系」を除外し、も
っぱら欧米の白人人種を指す
傾向が助長されたようです
(もっともこの種の印象は統
計的調査にはなじまず、また
統計を取ったとしても、その
結果を公共の機関として発表
することそのものが、政治的
に不適切な場合もある)。た
だし、1990年代前半から、と
りわけ日本で働く外国人プロ
野球選手を「外人」呼ばわり
するのは人種差別であるとの
指摘がなされ、テレビなどの
解説者も「外人選手」とい
った言葉の使用を「自粛」す
るに至った様子。

つ不明です。たしかに悪性・重症の英語中毒を患っている日本の英語教育への警鐘としてはある程度納得できるにせよ、津田教授の主張はしかし、あまりに「欧米人」という仮想敵にとらわれすぎているのではないでしょう。

たとえば日本に滞在する多くのアジアからの外国人たちにとって、日本で日本語を強要されることそのものが、いかなる精神的抑圧や実際の社会的差別を生み出しているか、という点に我々「日本人」は目をつぶってよいのでしょうか。たとえそれが英語支配への対抗手段だとしても、「日本」では日本語を、という主張そのものが、それ自体で津田教授の意図とは別の政治的な威力を発揮してしまいます。分かりやすい例をあげるならば、アイヌの人々がアイヌ語で主張する権利を認めるためには、アイヌ民族は「日本語支配」を脱するために「日本」から独立する義務があるのでしょうか。違った言語をしゃべる意志のある人々にその意志の遂行を許さない状況。それを、「言語支配」と呼んだのではなかったのでしょうか。ある国語や国際語が及ぼす支配力とは、それに抗おうとする者もまたその国語や国際語に依存しなければならない、という逆説にこそある、という議論の出発点と「日本語支配」の実態とを、どうやら津田英語支配論は見逃してしまったようです¹⁰⁾。

「日本」を「発信」することは可能か

そもそも、アイヌの人々がほぼ完全に「日本語」によって「支配」されてきたのに対して、英語ができなくとも無事に一生を終われる「日本人」は、日本列島に生息しているかぎり、実はもともと英語に支配などされていない。「英語支配」とはこの列島にあっては、英語教育に携わる一部の人たちの妄想のなかで異常増殖した鬼っこだったのかもしれない。むしろ問題なのは、①発信型（即「アメリカ人」？）や受信型（即「日本人」？）という文化の型や傾向と、②その媒体である言語の選択（英語／日本語）と、さらには③その媒体がたまたま現代の国際社会でもっている支配力、国際競争力という3者が曖昧に癒着して論じ

10) 言語帝国主義 特定の言語の使用を強制される状況を、かつての植民地支配の時代における政治上の支配との類推で言語帝国主義と呼ぶ場合がある（「帝国主義」そのものについては本書第11章のQ&A 1を参照）。具体的には朝鮮半島支配下や台湾領有、信託統治下の「南洋」さらには戦時下の占領地で日本語の使用が強制され、義務教育に取り入れられた例を「日本語帝国主義」などとして批判する場合がある（本章注21参照）。国際的な会合などで英語が公用語として幅を効かせ、それ以外の言語の使用が除外されることで、英語圏の出席者に有利な政治的状况が生まれる弊害を「英語帝国主義」として糾弾する場合もある。言語支配のメカニズムの社会的分析に関しては、ピエール・ブルデュール『話すということ』稲賀繁美訳、藤原書店、1993を参照のこと。

られてしまう日本社会の風潮にあるようです。少し具体的に考えてみましょう。

問い7：異文化接触に際して、「発信型の文化」、「受信型の文化」という区別がされた場合、諸君はどのように振る舞うのがふさわしいと考えるか。理由を付して述べよ。

ご参考まで——ある大学で、大多数が日本で教育を受けて来た学生諸君の意見を聞くと、①「我々は日本人なのだから受信型でよい」。②「これからの国際社会では日本人も発信型になって行かなくてはならない」。③「アメリカに行ったら発信型、日本では受信型と使い分ければよい。さもないとアメリカ人にはバカにされるし、日本社会では爪弾きにされる」という意見に分かれました。これらの回答を分析してみましょう。

まず①「我々は日本人なのだから受信型でよい」という意見に固執することは、「日本人なのだから『国際社会』（とは何だろう？）から誤解されたって構わない」という唯我独尊、居直りに通じる危険があるでしょう。②反対に「日本を発信型に変えなければならない」という意見は、「発信を礼儀とは考えず、謙譲、沈黙、忍従を美德とする日本の文化」を裏切ることになりかねない。③だが、「場合によって使い分ければよい」という意見は、郷に入っては郷に従え、長いものに巻かれろという姿勢でしょう。これが正しい、と主張した学生諸君がたいへんに多かったのですが、「郷に入っては」とか「長いものに」という発想そのものが、これまた「典型的に日本人的な行動様式」で、この「無節操さ」、「無原則」な場当たりの対処が、「日本人は信頼できない」という海外での「誤解」（だろうか？）の元凶になっているのではないのでしょうか。④そして「帰国子女」¹¹⁾と呼ばれる人々にしばしば観察される症例ですが、受信型と発信型の使い分けをするのは精神的にヒドクしんどいだけでなく（定義からして分裂症的／二重人格的です）、そういう才能を発揮する「ヘンな日本人」を差別しいじめて、潰してしまう体質が、「均

11) 帰国子女 両親の海外滞在などの理由で日本で義務教育を受けてこなかった日本国籍の帰国児童、生徒に配慮した学習指導を行うために導入された範疇。大学受験、大学院受験の場合にも特例として別個の受験資格を認めるための文部省用語。ただし子女という表現が女性差別を含むとして「帰国生」と呼び代える場合もある。しかしながら、国籍所有者の一部を、教育内容によって制度的に一般国民と区別する発想そのものが、日本の教育制度の均質性への拘りと閉鎖性を象徴し、また教育の現場での「いじめ」などの温床となるとともに日本社会の閉鎖体質を助長する結果ともなっている、との批判もありましょう。渡部淳、和田雅史『帰国生のいる教室』（NHK ブックス、1991）を参照。

質志向」の日本の社会——とりわけ教育制度——にはあるのではないのでしょうか。

ちなみに津田教授は「西洋的自我の模倣ではなく、日本人が主体的に欲求する自我の追求を正直に行うべきである」と提言しています。しかし「日本人が主体的に」という表現の内容ははっきりしません。「正直」ならそれで通用するのでしょうか。これでは「精神一統何事か成らざらん」式の日本の精神論に逆戻りです。また「日本人の統一的な自我には日本語が不可欠であることを認識すること」が大切との指摘もみえますが、日本人的自我を英語という発信媒体に同調させることができるのかどうか、英語で発信させてはもはや日本の自我が破壊してしまうのか、それならばいかにして日本語を理解できない外国人に、日本の自我の主張や主張の欠如を理解させることができるのか。また「西洋的自我の模倣に陥」らないような英語による発信方法があるのか。それとも受信型の日本の自我の持ち主は発信など慎むべきなのか。そうした問いに、この提言は残念ながらひとつも答えてはくれません。

むしろここから分かってくるのは、英語による発信と日本の風俗習慣との相性の悪さでしょう。「発信」を身につけることは、日本文化で良しとされてきた、謙譲の美德や「沈黙は金」といった作法、行動様式、礼儀とは根本的に折り合わない、もうひとつ別の作法を身につけるといふ、たいへんな苦行に等しい訓練らしいことが分ってきます¹²⁾。でも「日本人」であることと「英語で発信」することは両立しないのでしょうか。

C. 眼差しの倫理学にむけて

他者の土俵に乗ること

ある社会で常識とか美德とされる作法や行動様式の背後には、意識される場合や無意識の場合も含めて、そうした行動規範を括る論理体系を想定できます。もちろん地域差はありますが、日本には「日本の論理」と呼べる規範があるようです。この「日

12) 日本文化が発信型の外国語学習とはきわめて相性の悪いものであることを分かりやすく示してくれたものに、例えば松本青也氏の『日米文化の特質』（研究社出版、1994）があります。「謙遜志向」の日本人社会には対等の立場での会話は存在せず、「集団志向」の学習癖では個人的な意見は抑圧され、ディベートは日本人の「依存志向」を逆撫でするし、模範解答を尊重する「形式志向」の日本人には本当の議論など無理だし、相手と合わせる「調和志向」、成り行きに逆らわない「自然志向」では、個人の責任を確立すること自体が異様だし、だから日本はだめなんだ、日本社会で欧米的な「個人」は形成できないんだ、という「悲観志向」がつのるし、またいざ国際舞台で発信となると「緊張志向」に邪魔され、失敗恐怖症だから会話訓練も効果が上がらない（191-9頁）。外国知らずの日本の大学生相手の「比較文化」の授業では、通常このあたりの「日米比較」が限界のようです。

本の論理」と相手の論理が違う場合、相手の論理で理解できる形で自分の論理を主張し、しかもそれが自分の論理を裏切らない、ということにはたして可能なのでしょうか。例えば、アイ・コンタクトを礼儀と考える論理の持ち主と、それを無礼と考える論理の持ち主との遭遇ではどうすればよいのでしょうか。また初対面の仕事相手には必ず御土産を持参するのが当然の礼儀とされる文化圏と、贈答はあくまで個人の感情の問題であって、仕事のうえでの贈答は失礼かつ不適切で賄賂と見なされかねない文化圏とがある。上司から御土産を託された日本の特派員は「外国」でその御土産をどう処分すればよいのでしょうか。日本語や日本的作法という媒体が通用しない世界では、否応無く日本語や日本文化での美德が通用しない状況を前にすることになります。そのような状況のなかで、しかも日本の作法を通用させることなどできるのでしょうか。

いわゆる「国際社会」に出れば圧倒的に「少数派」である日本が、「欧米」によって代表される「多数派」と意思の疎通を図る場合には、好むと好まざるとにかかわらず、今日の世界で通用している「国際語」の助けを借りたり、相手方の言語を用いた他流試合を強いられることになります。また一旦アメリカ流の礼儀作法や行動様式の論理に染まってしまうと、回帰不能地点 (point of no return) を越えてしまい、戻ろうとしても、日本という大気圏への再突入に失敗して、外へと弾き飛ばされたり、燃え尽きたりしてしまうような症例も、「帰国子女」や留学帰りには散見されるようです。

そのような理不尽な状況におかれてなお精神的に耐えるために必要とされる心がまえを、パリ(知る人ぞ知る日本人旅行者「癡狂」のメッカ!)で長年日本人の心の治療に従事している太田博昭さん(1949-)は、次のように3カ条に定式化しています。

①少数派が自らの論理構造(常識)を熟知していること

②多数派の論理(常識)に熟達していて、それを使いこなせること

③自らの論理（常識）を、多数派の論理（常識）を使って再構成できること」¹³⁾

13) 太田博昭「バリ症候群」
トラベルジャーナル, 1991,
275頁。

ここで問い8：あるべき行動様式は「受信型」か「発信型」か、という問い7に対する学生たちの3種類の反応を、太田定式3カ条に沿って検討し、それぞれどこに欠陥があるのか分析せよ。

「日本は外向けに発信する必要はない」という①の意見は、「少数派が自分の論理構造を熟知していない」どころか熟知する必要さえ感じていないという典型例でしょう。そもそも日本には「論理」はなくて「情緒」しかなく、それで「常識」が決まってしまう傾向も高いようですが、「一般大衆」はそのことにも無自覚です。「どこの国だって、普通の国民の意識なんて救いがたく低いものだ」という侮蔑発言(?)は正論かもしれませんが(『朝日新聞』1994年11月16日のインタビュー記事における猪口孝氏(1944-)の発言を言い換えたもの)、日本に埋没しているかぎり、行動の規範は常識と化し、意識にすら上りません。だが「言わなくてもわかる」を原理・美德とする社会を「言わなければわからない社会」に向かって説明する、となると「言わない」はずのことを「言う」ことになる。それが自己矛盾だからこそ「言っても無駄」という諦めが生まれ「発信など不要」と内向するのかもしれませんが。

つぎに②の意見の人は、「多数派の論理（ないし常識）にそって『日本』の主張をしなければ、日本は『常識はずれ』ゆえに世界の孤児になって取り残される。それでは大変だ」と考えているようです。発言のためには「自らの論理構造（常識）を熟知していること」が必要ですが、「日本の常識は没論理」だという主張を「論理的」にする、というのは「日本人」の名誉か、悲惨か。

それでは③の「郷に入っては」式の内外使い分けの処世術ですが、露骨に言えば国内向けと海外向けでふたつの顔を使い分

ける二枚舌こそが「少数派たる自らの論理ないしは常識を、多数派の論理や常識（例えば「国際社会の掟」）にそって再構成すること」の偽らざる実態でしょう。そしてそこには「日本人の論理」とは、「論理的一貫性の欠如」であり、「日本人の常識」とはホンネとタテマエの無節操な使い分けにほかならない、という身も蓋もないオマケまでついでにしまいます。

他者への配慮と自己の再構成——忠実さの逆説

受信型であれ発信型であれ、はたまた国内と国外で原則を変更するダブル・スタンダードの「郷に入っては」式の対応であれ、いずれも外国に向けて誠実たらんとすれば、日本にたいしては不誠実、日本にたいして誠実であれば、外国から不誠実といわれる。こうなるともう板挟みで、はたしてなかが誠実でなかが不誠実な態度なのか困ってしまいます。この矛盾ないし二重拘束 (double bind) を私は「外交官的状况」と呼んでいます¹⁴⁾。かつて第二次世界大戦で米軍に志願した日系二世の兵士が、「敵」である日本兵に投降を呼びかけたとき、裏切り者呼ばわりする日本兵に対して自分の立場を説明するのに、(祖国アメリカ)に忠ならんと欲すれば(日本人の両親にたいして)孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」とその苦衷を訴えたという話があります。それをもしよって言えば、英語に忠ならんと欲すれば日本文化に孝ならずという面が——日系米兵が苦しんだあの精神的な矛盾もろとも——「日本」を海外へと「発信」する営みには付きまとうようにも思われます。

ここで内輪の論理を外向きに「再構成」するという意味が分からない、という質問をした学生がありました。大切な論点なので、具体的に考えてみましょう。「パーティーには夫人を同伴しない」のが礼儀という日本での宴会の常識は、「同伴するのが礼儀」の国では「女性蔑視」の証拠になってしまいます。そうではない(?)ことを納得されるように説明するためには、日本では決してする必要もなく、またすれば滑稽でもあるような論理を無理やりにでも「再構成」することが不可欠となるのでは

14) 二重拘束 (ダブル・バインド) 心理学者、哲学者のグレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson, 1904-80) が広めた概念で、ふたつの規範の板挟みとなり、それが悪循環を起す状況を指します。より詳しくは『精神の生態学』(佐藤良明訳, 思索社, 1990, ヴァージョン・アップ版) 参照。またそれが異文化接触でいかなる病的現象を作り上げるかの理論的分析としては、稲賀繁美『異文化理解の可能性と限界』【比較文化研究】28号, 東京大学教養学部, 1990, 135-51頁。その仏文原文は“L'impossible avant-garde au Japon”, in *Connaissance et Réciprocité*, préface de Umberto Eco, CIACO éditeur, Louvan-La-Neuve, 1988, pp. 197-207. その英訳は“The Impossible Avant-Garde in Japan”, in *Year-book of Comparative and General Literature*, No. 41 [1993], 1995, pp. 67-75. また中国語訳は『獅在華夏—文化双方向認識的策略問題』(主編: 王賓, Alain Le Pichon, 広州, 中山大学出版社, 1993) に「理解異質文化的可能性与局限性」(pp. 99-110) として読むことができます。なお米原万里『不実な美女か貞淑な醜女か』(徳間書店, 1994) もおすすめです。

ないでしょうか（是非自分がそんな場面に直面したと想定して「再構成」してみてください）。「日本人なのだから日本人の流儀を押し通すべきだ」という、勇ましいけれども、教室にいる外国人留学生の存在を忘れたような意見を表明した学生もありましたが、そんな態度を取ったら北米では「政治的に不適切」（politically incorrect）¹⁵⁾で「礼儀知らずの無礼者」、「東洋の野蛮人」と「誤解（!）」されて相手にされなくなる。否、下手をすれば善意を誤解されて「銃殺」されても、誤解されるような行動のほうが軽率だったとして、刑事的には文句も言えないような状況さえ実際に発生したことは、我々の記憶に新しいところです¹⁶⁾。

北米の知識人階級とのおつきあいで、「奥さんは何をしている」とたずねられて、ついうっかり「別に何も」と答えると、相手の顔がこわばった。小説家である自分の個人的編集者をしている、と答えてもまだ納得してくれない。実は写真をやっていて、と言うと初めて「それは素晴らしい」と納得してくれた、とは村上春樹（1949-）氏の『やがて哀しき外国語』の一節ですが、間違っても日本流の謙譲の美德を発揮して身内を褒めるのを憚ったりしてはいけな。うっかり自分の妻が「夫に従属」しているかのような印象を与えては（つまり「奥さん」や「家内」という表現では）、社会道徳や礼儀に反する、というのが昨今のアメリカ合州国の知識階級の「倫理」であって、それに適した「説明」を捏造でもしないことには、人間扱いしてもらえない、それが『やがて哀しき外国語』だというのが、この経験から村上さんが得た教訓だったようです¹⁷⁾。日本の常識を納得してもらうためには、いかに理不尽なこととはいえ、相手の論理に沿って、日本では言挙げなどしたこともなかったような屁理屈（＝論理）を捏ねあげ、それを相手側の論理に沿って錆直さなくてはならない。相手の常識を逆撫でしないような、「理論武装」をしなくては、相手の理解や納得を得ることもできはしなかったのです。

15) politically correct 政治的妥当性とも訳す。元來はそうした要求をする、いわゆる文化多元主義（Multi-Culturalism）を背景とした主張に対して危機感を抱いた保守派が、否定的な意味合いで貼ったレッテル。〔1960年代の公民権運動やマイノリティーの権利獲得運動の延長線上に登場した文化多元主義は、1980年代以降、アメリカ合州国のアカデミズムの場での「非白人」、フェミニスト、同性愛者を中心に進められてきた〕（この規定や括弧内の表現も場合によっては政治的に不適切）。従來の白人ヨーロッパ系の価値観や伝統への偏向を是正し、排除されてきた文化的マイノリティーの復権や権利主張がさまざまな改革を推進し、これら初等・中等教育にも波及した。ジェームズ・フィン・ガーナー「政治的に正しいおとぎ話」なる書物（デューブ・スペクター、真野流監修、田口佐紀子共訳、DHC刊、1995）や、能登路雅子「文化多元主義の行方」〔いま、なぜ民族か〕（運實重彦、山内昌之編、東京大学出版会、1994所収）を参照。

16) 服部剛文 [はっとり・よしひろ] 君事件 1992年10月のハロウィーン・クイーンの晩に、日本人留学生、服部剛文（当時16歳）がホーム・ステイ先のルイジアナ州パトナルーシュで訪問先を間違えて銃殺された事件。クリントン大統領からの電報など日本では大々的に報道。両親の服部政一、美恵子夫妻らを中心に「アメリカの家庭から銃の撤去を求める請願」が日米併せて195万の署名を集め、激励の手紙も二千通。だが内政干渉や日米関係の悪化への懸念、夫妻の行動を批判する文書も存在。刑事裁判では93年5月の判決で被告人の無罪が決定。日本政府は公には関与せず。結果として米国での銃規制団体のネットワーク化と

統規制法案提起を促進。同時に日米の統に対する社会意識差、裁判にかんする社会慣習の差異、米国南部の対日感情、地方都市の日常的殺人事件を、日本人がらみなら針小棒大に報道する日本のマスコミの特性などが、93年10月から翌年6月の新聞記事を通してうかがわれます。

17) 村上春樹『やがて哀しき外国語』講談社、1994、148頁以下。またこの逸話は『朝日新聞』「窓」1994年9月19日にも取り上げられました。

なおここでは「アメリカ合衆国」と表記する慣例には逆らって、United States of Americaの訳として「アメリカ合州国」の表記を使いました。本章の引用部では慣例にしたがって「米国」とか「アメリカ人」といった表記も残しましたが、「米国」は日本以外では通用せず——中国では「美国」です——、「アメリカ」といえば本来南北両アメリカ大陸を覆うはずの概念なのに、なぜか我々はU.S.A.とその住人のことしか思い描かない習慣がついていることも、「常識」の問い直しとして大切でしょう。

18) 『朝日新聞』社説、1994年12月31日の引用から。

19) 『朝日新聞』1995年1月3日の記事から。

少数派の発言権とその倫理

そこで最後の問題が出て来ます。土俵がしよせん多数派の掟によって支配されているのなら、そこでいかにして少数派の利益が保証されうるのか、という問題です。ウォーターゲイト事件（どういう事件だったのだろう）の特別検察官を勤めたアーチバルド・コックス教授（Archibald Cox, 1912-）の言葉として、こういうのがあります。国旗敬礼拒否を認めたアメリカ合州国連邦最高裁の判決についての記述だそうですが、なぜそのような「厄介者たちの立場」を保護するのかとの問いかけにたいして、こう答えたというのです。「国家が彼らの口を封じることができるなら、[中略]次はわれわれの番になる」、「答えは、因習にとらわれないある少数派が真実を探しあてるのではないか、という意識にある」と¹⁸⁾。コックス教授はそうした意識をもつことが大切だ、と語っているのに対し、これも高名な歴史学者で、その著作『大国の興亡』が世界的ベストセラーとなったポール・ケネディー、エール大学教授（Paul Kennedy, 1941-）は、あるインタビューで紛争の絶えない今日の国際情勢について発言し、「少数派の権利が侵害されたとき、国際社会[the International Community]が断固とした行動をとれば紛争の芽はつめる」といった発言をしています¹⁹⁾。問題にしたいのは、この一見よく似たふたつの発言を隔てるおおきな落差です。

問い9：ともすれば多数決で物事が決定される民主主義の世界にあって、少数者の発言はいかに尊重されるべきか、ないしは尊重されるべきでないのか。また少数者の意見はいかにして保証されうるか。多数派はなぜ少数派の意見を尊重しなければならず、またいかに尊重すべきなのか。コックス教授とケネディー教授の発言との差異を考慮に入れながら、上にみた「日本人はいかに国際的に発信すべきか、それとも発信を謹むべきか」（問い7）に関する3つの態度に即して分析せよ。

以下にあげるのは、模範解答ではなく、あくまで皆さんが考察を進めてゆくうえでの、いくつかの指針ないしは、迷わすための「罨」ですから要注意。

①まず日本人は日本で受信に徹しておればよい、との見解について考えましょう。たしかに欧米中心の「国際社会」で日本は「少数派」なのかもしれませんが、その少数派の「ドメスティック」な「常識」を「善」として押しつける「横暴」ぶりを、「日本人」たちの多くは、それと知らぬまま、日本国内に住んでいる「少数派」の外国人に対して発揮しています。また「大人」は「子供」に対して、「日本人＝被害者意識」が「日本人」を加害者に行っている現実には気づいてほしい。

②「少数派の意見を多数派が政治的な権威をもって圧殺することができるなら、明日の多数派は今日の我々自身の意見を圧殺することになる」。だからこそ、「常識や因習とは合致しない少数派が真実を探しあてるのではないか」という意識を忘れない心構えが大切なのだ、とアーチバルド・コックスは言いたいようです(こうした固有名詞も覚えましょう)。この論理では、少数派を抹殺しない理由は自己保存のための配慮と裏腹です。ところでこうした少数派の存在を容認する法廷で自己主張をするためにも、最低限その法廷の流儀はわきまえておかねばなりません。英語はできなくても通訳がついてくれるはずですが(日本の裁判所ではこの通訳制度すらまだ未発達です)、そのまま英語に翻訳されても誤解を受けないような、英語の論理にかなった証言を日本語の論理で組み立てることがはたして皆さんにはできるでしょうか。訴えを起こすことそのものがまだ社会的なタブーとなっている場合も多い「日本文化」に忠実で、しかもコックス先生のお眼鏡に適うような「真実」を法廷で、その仕来りに従って発信することが、はたして「普通の日本人」の教養で可能でしょうか。そもそも仏教徒や神道信者もキリスト教の宣誓をするのでしょうか。

③さてしかしポール・ケネディー教授が「少数派の権利が侵

害されたとき、国際社会は断固とした行動をとるべきだ」と言うとき、その見解は一見コックス先生と似ているけれど、実は決定的に違っているのではないのでしょうか。ケネディーのいいかたでは、「少数派擁護」を口実とし、手段として、「多数派」（たとえば「国際社会」）が自分の意図の実現に利用する危険がないのでしょうか。実際、それが日本相手の捕鯨問題であれ、中国相手の人権問題であれ、ボスニア情勢であれ、フランス相手の核実験問題であれ、ニューヨークに本拠を置く大ネットワークのニュース・キャスターが「国際社会」というとき、それは自分たち [we Americans] の意思表示をぼかしつつ正当化する婉曲語法でしかないことに、外国人視聴者は驚かされます。そしてすくなくとも筆者の貧弱な経験に照らすかぎり、「普通」の「アメリカ人」たちは（「アメリカ」即国際正義と今でも信じていたいからでしょうか、その自負あってでしょうか）、この「国際社会」が自分たちの国の都合でまことに手前勝手・変幻自在な姿を取っていることにすら、多くの場合無自覚のままなのです²⁰。

問い9との関連では、その「少数派」の意見を聞く「土俵」は「少数派」の土俵ではなくあくまで「多数派」によってしつらえられた土俵であり、ここでは「少数派」の意見は「土俵」に合ったように「再構成」されていることになりませんが、「聞いてもらえるように再構成された少数派の意見」とは、それが容認される限りですでにいく分かは「多数派」の意見ではないのでしょうか。「多様性」を擁護する「土俵」ははたして「均質」で「平等」たりうるのでしょうか。その「平等性」はなにによって保証され、いかなる「正義」によって保障されるのでしょうか。

*

「国際社会」とは、そうしたおそらく解決のない矛盾のうえで、絶えざる文化摩擦の狭間に浮かんでいる不安定な浮き島でしかないのかもしれませんが。皆さんが活躍する21世紀の日本は、こうした「国際社会」と決して無縁ではいられない「責任」

20) この傾向はもちろん「アメリカ人」に限られるわけではありません。「イギリス」のジョン・メイジャー首相は1990年2月のテレビ番組“Good Morning America”のなかで、“the West”（西洋、西側）と口にした直後、あわててこれを「国際社会」「the World Community」と言い直した、という事例が報告されています（Cf. Samuel P. Huntington, “The Clash of Civilizations?”, in *Foreign Affairs*, Summer, 1993）。そしてほかならぬ日本のマスコミや我々自身が「国際社会」の存在を最も素朴に信じているのかもしれませんが。

をもつことでしょう。本書で皆さんは文学を中心として、過去の人々が他者の文化にいかなる眼差しを注ぎ、そこからいかに自己を再認識したかの具体例を豊富に見ることになります。しかしそれらの事実を知っただけでは、それらの事実はまだ皆さんの人生となんの係わりも持たない死んだ知識にすぎません。

本章は一見、以下の章とは無関係に見えますが、本書で皆さんが得た知識を皆さんの生活の糧としていただくための道しるべ、ウォーミング・アップとして執筆しました。皆さんがこの先、異国の友人を多く作り、視線の交錯のなかでさまざまな文化摩擦を体験して、ときには傷つきあうその切実な体験のなかで「国境」に縛られない人、ないし少なくとも「国境」の存在に無自覚ではない人（それを「国際人」と定義しなおしてはどうでしょうか）となっていただくことを。そして本書を通じて、またそれを越えて、よい航海をされんことを、お祈りします²¹⁾。

21) 「国境の越え方」についてさらに考えるうえで参考となる書物を、最近発刊され入手も容易な日本語のものに限り、いくつか挙げておきます。

阿部良雄『西欧との対話』（第三文明社、レグルス文庫、1989）。石垣綾子『わが愛、わがアメリカ』（親本1982；ちくま文庫、1991）。犬養道子『国境線の上で考える』（岩波書店、1988）。今福龍太『クレオール主義』（青土社、1991）；『荒野のロマネスク』（筑摩書房、1989）；『移り住む魂たち』（中央公論社、1993）。エリアス・カネッティ『マラケシュの声』（岩田行一訳、法政大学出版局、1973）。管啓次郎『コロンプスの犬』（弘文堂、1989）。ヴィクトール・セガレン『くエグゾティスム』に関する試論（木下誠訳、現代企画室、1995）。ノーマ・フィールド『天皇の逝く国で』（大島かおり訳、みすず書房、1994）。四方田犬彦『ストレンジジャー・ザン・ニューヨーク』（朝日新聞社、1989）；『越境のレッスン』（丸善ライブラリー、1992）など。

さらに狭義の文学にかかわるものとしては、『越境する世界文学』（河出書房新社、1992）。川村湊『異郷の昭和文学』（岩波新書、1990）；『南洋・樺太の日本文学』（筑摩書房、1994）；『海を渡った日本語』（青土社、1994）。島田隴二『華麗島文学志——日本詩人の台湾体験』（明治書院、1995）。垂水知恵『台湾の日本語文学』（五柳書房、1995）。西成彦『イディッシュ——移動文学論（I）』（作品社、1995）。沼野充義『屋根の上のバイリンガル』（筑摩書房、1992）など。

執筆者紹介 (50音順)

一柳廣孝 (いちやなぎ・ひろたか)
1959年生 横浜国立大学助教授

田所光男 (たどころ・みつお)
1956年生 名古屋大学助教授

稲賀繁美 (いなが・しげみ)
1957年生 三重大学助教授

中村和恵 (なかむら・かずえ)
1966年生 帝塚山学院大学専任講師

岩田和男 (いわた・かずお)
1953年生 愛知学院大学助教授

成田興史 (なりた・たつし)
1942年生 名古屋市立大学教授

大貫 徹 (おおぬき・とおる)
1953年生 名古屋工業大学助教授

平林 一 (ひらばやし・はじめ)
1926年生 愛知女子短期大学名誉教授

佐々木英昭 (ささき・ひであき)
1954年生 名古屋工業大学助教授

升本匡彦 (ますもと・まさひこ)
1934年生 名古屋大学教授

武田美保子 (たけだ・みほこ)
1952年生 名古屋短期大学教授

吉田正信 (よしだ・まさのぶ)
1941年生 愛知教育大学教授

武田悠一 (たけだ・ゆういち)
1947年生 愛知学院大学教授

異文化への視線

1996年3月30日 初版第1刷発行

定価はカバーに
表示しています

編者 佐々木 英 昭

発行者 浅 井 淳 平

発行所 財団法人 名古屋大学出版会

〒464-01 名古屋市千種区不老町 名古屋大学構内
電話(052)781-5027/FAX(052)781-0697

© SASAKI Hideaki et al. 1996

Printed in Japan

印刷・製本 ㈱太洋社

ISBN4-8158-0282-3

乱丁・落丁はお取替えいたします。

☐ <日本複写権センター委託出版物>

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法
上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合
は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。